文化財再発見コーナー

たかおか 温故知新

戸出の俳人・尾崎康工／江戸時代の大ベストセラー『俳諧百一集』

尾崎康工(1701～79)は越中を代表する俳人の一人です。江戸時代、俳諧は全国の庶民に愛されました。特に1690年代以降は、松尾芭蕉の「蕉(正)風」が全国的にブームになり、高岡町をはじめ、戸出など各町村でも俳諧は盛んでした。

康工は、戸出の豪商・古武屋孫右衛門の三男として生まれ、のち分家し沢屋伊兵衛と称します。康工のほか、八椿舎、六壁庵とも号しました。はじめ蕉風伊勢派の中川乙由に学び、40歳頃から芭蕉を慕い諸国を歴遊。芭蕉の墓のある義仲寺（滋賀県大津市）に墓守として長期間（一説に20年）滞在しました。晩年、戸出の「六壁庵」という庵（現在の太玄寺）に住み、門人の育成に励みました。

康工が、明和2年(1765)に刊行した『俳諧百一集』は、全国の俳人100名の秀句を選び、肖像（康工画）も掲載しており、「蕉門十哲」ら芭蕉の高弟や井波瑞泉寺住職の浪化、加賀の千代女など全国の著名俳人との交友の広い康工ならではの著作です。この本は好評で版が重ねられ、嘉永3年(1850)には普及版も出版されるベストセラーとなりました。（仁ヶ竹主幹）

問合先　博物館☎20－1572

▲「康工」『俳諧百一集』1765年（博物館蔵）

▲「芭蕉」『俳諧百一集』1765年（博物館蔵）